

本の街の誕生——東京都千代田区神田神保町

JR御茶ノ水駅で降りてお茶の水橋口に出ると、そこは神田駿河台というところで、近くの杏雲堂きょううんどう病院敷地の一角には「大久保彦左衛門屋敷跡」と記された碑がある。駿河台という町名は、徳川家康とともに駿河国駿府（現在の静岡県静岡市）に移住していった大久保彦左衛門などの家臣たちが、家康が亡くなった後に江戸に戻ってこの地に居を構えたことによる。いまも残る神田淡路町や神田神保町の町名が鈴木淡路守、神保長治といった旗本の名前に由来するように、当時の駿河台から皇居周辺には旗本・大名屋敷が多くあった。明治維新後、それらの屋敷には新政府の高官や京都から来た公家たちが住むようになるが、なかでも大名屋敷は学校の校舎としては最適であった。大人数を収容しなければならなかったからである。市島謙吉^①は、明治八年（一九三三）に新潟から上京、東京英語学校（のちに大学予備門、第一高等学校）に入学するが、そこは越後国高田藩（現在の新潟県上越市）藩主榊原侯の屋敷があったところで、その様子を、「昔のま、学校に充てたので、門も昔のま、であつたし、教室も元の諸室に多少の手入をなし、畳を上げ硝子戸をはめた位の程度で、仮校舎と見るべきものであつた。」と書いており、多くは旧大名屋敷を改造した急ごしらえのものが多かった。そのなかにあって、東京英語学校の道を挟んで反対側にあつた開成学校については、「木造建築ではあつたが、英語学校のような間に合わせものでなく堂々たる白壁館で、寄宿舎もあり、外国教師の爲め幾棟の教師館もあり、又、数百人を容れ得る大講堂もあつた。」（神保町の

憶ひ出」『富山房五十年』と書いている。その、洋風二階建て総坪数千八百余の開成学校は、文部省直轄の高等教育機関として上野国安中藩（現在の群馬県安中市）藩主板倉侯の屋敷跡に建てられたもので、現在の学士会館の場所にあたる。そこには現在、「東京大学発祥の地」と「新島襄生誕の地」の二つの碑が建てられているが、開成学校はいくつかの変遷を経て現在の東京大学となり、京都の地で同志社を創立した新島襄は、天保十四年（一八四三）にその安中藩江戸屋敷で生まれた。

開国とともに諸外国との法整備が急がれ、また、義務教育制度の確立も急務だったこともあって、明治の半ばごろまでには神田一ツ橋、神保町を中心に法律関係を始めとする各種学校が次々と開校していった。やがて多くの学生が全国から集まるようになる。すると学生相手の本屋も増えてゆき、それまで日本橋を拠点として発達してきた出版の中心は神田神保町に移ってきた。

- ・ 明治二年（一八六九）、開成学校（東京大学の前身）が現在の学士会館の地で開校。
 - ・ 明治六年（一八七三）、一ツ橋通町一番地（現在の如水会館の辺り）に東京外国語学校（東京外国語大学の前身）開設。
 - ・ 明治十年（一八七七）、華族のための教育機関として華族学校（学習院の前身）が神田錦町で開校。
 - ・ 明治十三年（一八八〇）、神田駿河台に東京法学社（法政大学の前身）開校。
 - ・ 明治十八年（一八八五）、専修学校（専修大学の前身）が京橋区木挽町から神田神保町三丁目に移転。
- 英吉利法律学校（中央大学の前身）が神田錦町二丁目を開校。

- ・ 明治十九年（一八八六）、共立女子職業学校（共立女子学園の前身）が神田一ツ橋の現在地に開校。明治法律学校（明治大学の前身）が有楽町から駿河台に移転。
- ・ 明治二十八年（一八九五）、飯田橋の皇典講究所内に創設されていた日本法律学校（日本大学の前身）が独立、神田三崎町（現在の法学部キャンパスの地）に開校。

明治中頃の神田神保町付近地図をみると、明治八年（一八七五）創業という小川町の神谷書店が令和元年（二〇一九）十二月三十日をもって閉店したものの、今も残っている書店や出版社がいくつかある。法律書出版で知られる有斐閣は、明治十年（一八七七）に埼玉出身の江草斧太郎が創業、当初は有史閣という名の古書店だったが、二年後には有斐閣と社名を改め法律・経済関係の出版を始めた。現在のすざらん通りにある三省堂書店は、明治十四年（一八八一）、亀井忠一により、当初は古書店として、二年後には新刊書も扱うようになり、さらにその一年後には出版も始めた。富山房は、小野梓の東洋館書店で修業した坂本嘉治馬が、小野の死去を機に梓の義兄小野義眞の庇護を受けて明治十九年（一八八六）に創業した。明治二十年（一八八七）に新潟県長岡出身の大橋佐平によって創業された博文館は、今では『博文館日記』にその名を留めているに過ぎないが、明治二十年発刊の雑誌『日本大家論集』を皮切りに、その後十年間で二十九種の雑誌を発刊していずれも成功を収めた。さらに、出版部門としての博文館のほかに、流通部門としての東京堂書店、印刷・製本部門としての共同印刷を設立して現在の出版産業の礎を築いた。三省堂書店と富山房の間にあった上田屋は、明治二十年（一八八七）に新潟出身の長井庄吉によって設立され

た取次店だったが、そこで修業した同じ新潟出身の小酒井五一郎は、明治四十年（一九〇七）に英語研究社（のちの研究社）を設立した。駿河台下にあった中西屋書店は、日本橋「丸善」創業者の早矢仕^{はやしゆうてい}有^{ゆう}的^{てき}が明治十四年（一八八二）に開いた外国書専門の古本屋で、店名は中国の「中」と西洋の「西」からとった。明治二十年（一八八七）、早矢仕有^{はやしゆうてい}的^{てき}の遠縁に当たる池田治朗吉が、中西屋の一部を借りて輸入文具の店を開いたのが現在の文房堂の始まりという。

- (1) 市島謙吉（一八六〇—一九四四）現在の新潟県阿賀野市出身。号は春城。東京帝国大学文科中退。新潟新聞、読売新聞主筆、衆議院議員を歴任。大隈重信のもとで東京専門学校（早稲田大学の前身）の開設に尽力、初代図書館長。
- (2) 小野梓（一八五二—一八八六）米英に留学して法律、経済学を学ぶ。会計検査院などの官を辞してからは、政治（立憲改進黨の結成を推進）、教育（東京専門学校の設立に参画）、出版（東洋館書店を開く）の三つの活動に精魂を傾けた。
- (3) 小野義真（一八三九—一九〇五）現在の高知県宿毛市出身の実業家。日本鉄道株式会社、小岩井農場などの創立に関わる。小岩井農場の「小岩井」は、小野と岩崎彌之助（三菱第二社長）、井上勝（鉄道庁長官）の三人の名前から一字ずつとったもの。

鈴木一平、修学堂書店に入店する——東京市神田区表神保町

当時は表神保町と呼ばれた現在のすずらん通り、東京堂書店の並びに明治の半ばから大正半ばにかけて、修学堂書店（以下、修学堂）という取次業と出版業を兼ねた店があった。店主の名は辻本末吉といい、大阪で修業した後に当時一流の出版社だった東京日本橋の大倉書店に入り、その後独立して神田表神保町に店を開き、本屋仲間からは「辻末さん」と呼ばれていた。

明治三十五年（一九〇二）、その修学堂に鈴木平吉（のちの一平）という十六歳の少年が入店した。明治